

大阪から島根に来て21年になります  
が、今の教育の在り方について疑問を感じています。島根県総合教育審議会委員も2期4年務めました。

来た当時、観光、定住、教育などのテーマで地域おこしを始めました。その意図するところは価値観の違いでした。「これでいいのかな」。そんな気持ちでした。

## がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガリアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

# 価値観、創造性学ぶ授業 もっと

違う価値観を認め合い、共有する力が必要です。それが出来ない、県外に出ていく子供たちは潰れてしまいます。

高校を卒業したら誰でも県外に出たいもの。都会の素敵さに魅了されていきます。でも都会はいろいろな価値観を持つた人たちの集い場所です。

私が島根にきて受けた感覚は疎外感でした。私の言ったことがごとごとく跳ね返されました。受け入れようとする土壌がなかったのです。そんなことを言うのだったら「ここに来なきゃよかったのに」とさえ言われたことが1度や2度ではありません。

地元の小、中学校で価値観、創造性の授業をしたこともあります。市教育委員会にもときどき顔を出していました。歓迎されていませんでした。価値観、創造性は子供たちにとっては絶対に必要要素です。しかしそのような授業はあまりありません。調べてみたら教員の研修にすらそれは乏しいようです。先生が知ら

ずに、感じていないことを子供たちに教えることは不可能です。

私は現役時代、採用と社員教育を担当していました。まず採用では全国から年間1000名ほどの面接を行い、毎年100名ほど採用していました。採用基準は「叱嗟のときの対応力」が大半でした。したがって意地悪な質問ばかりでした。これだけのたくさんの人数をこなすには時間がかかりました。したがって余計なありきたりな、答えの分かっている質問はしませんでした。

ペーパーテストは一応しましたが、これは不採用時の説明に使いました。企業成績の良い時は採用基準を緩めて、多少余分に採用しました。不況になると選考基準は大幅に厳しくなりました。優秀な人材を獲得するため目標の人員に到達しなくても、そこで採用を我慢するようになりました。ということは学生たちにとってはとてもとても狭き門になったわけです。(その②に続く)